



アマチュアオーケストラ

# 新交響楽団第142回演奏会

The New Symphony Orchestra the 142nd Concert

## W.A.Mozart 33.Sinfonie B-dur

モーツァルト：交響曲第33番 変ロ長調 K.319

Wolfgang Amadeus MOZART: Symphony No.33 B-flat major K.319, 1779

## 伊福部 昭 日本狂詩曲

IFUKUBE Akira: Japanese Rhapsody, 1935

伊福部 昭 傘寿記念シリーズII

# Д.ШОСТАКОВИЧ ДЕСЯТАЯ СИМФОНΙΑ

ショスタコーヴィチ：交響曲第10番 ホ短調 作品93

Dimitry Dimitrievich SHOSTAKOVICH: Symphony No.10 in e minor Op.93, 1953

指揮

小泉 和裕

KOIZUMI Kazuhiro, conductor

1994年1月29日(土)6:30pm

東京芸術劇場

(池袋駅西口)

Saturday, January 29, 1994 at Tokyo Geijutsu Gekijo (Ikebukuro Sta. West Exit)

アマチュアオーケストラ

# 新交響楽団第142回演奏会

*The New Symphony Orchestra The 142nd Concert*



指揮：小泉 和裕

KOIZUMI Kazuhiro, conductor

## モーツァルト：交響曲第33番 変ロ長調 K.319

Wolfgang Amadeus MOZART : Symphony No.33 B-flat major K.319, 1779

第1楽章 *Allegro assai*

第2楽章 *Andante moderato*

第3楽章 *Menuetto*

第4楽章 *Finale, Allegro assai*

## 伊福部 昭：日本狂詩曲

IFUKUBE Akira : Japanese Rhapsody, 1935

第1楽章 夜想曲 *Nocturne*

第2楽章 祭 *Fête*

## ショスタコーヴィチ：交響曲第10番 ホ短調 作品93

Dimitry Dimitrievich SHOSTAKOVICH : Symphony No.10 in e minor Op.93, 1953

第1楽章 *Moderato*

第2楽章 *Allegro*

第3楽章 *Allegretto*

第4楽章 *Andante - Allegro*

1994年1月29日(土) 6:30p.m.

東京芸術劇場大ホール

Saturday, January 29, 1994 at Tokyo Geijutsu Gekijo

主催：新交響楽団

●指揮

## 小泉 和裕

KOIZUMI Kazuhiro, Conductor



1949年10月、京都に生まれる。1969年東京芸術大学に入学、山田一雄氏に師事。

1970年第2回民音指揮者コンクール第1位入賞、日本フィルハーモニー交響楽団に指揮研究員として入団。1972年7月、新日本フィルハーモニー交響楽団創立に際し、指揮者として参加。同年10月ベルリン音楽大学に入学、ラーベンシュタイン教授にオペラ指揮法を師事した。1973年夏、ボストンのタンゲルウッド音楽祭に参加。

1973年11月には、第3回カラヤン国際指揮者コンクールに第1位入賞、その後ベルリン・フィルを指揮してベルリン・デビューを飾った。1975年1月、新日本フィルの音楽監督に就任。同年3月にはベルリン・フィルの定期演奏会に出演し、好評を博した。

1976年1月には、パリのフランス国立放送響でラーベンシュタイン、ロストロポーヴィチと協演し、絶賛を博した。1979年12月に海外での活動をより充実させるために新日本フィルハーモニー交響楽団の音楽監督を辞任。

その後ベルリンに居をかまえ、ミュンヘン・フィル、バイエルン放送響、フィルハーモニア・フンガ

リカ、西ドイツ・フィル、その他、ヨーロッパ各地において精力的な指揮活動を行なう。また、アメリカにおいても、1978年ラヴィニア音楽祭でシカゴ交響楽団を指揮し大成功を収め、早速1980年3月のシカゴ交響楽団定期に登場、注目を集めた。その他、ボストン、デトロイト、シンシナティ、トロント、モントリオールなどにも客演している。

1983/84年シーズンから1988/89年シーズンまでカナダのウィニペグ交響楽団の音楽監督、1986年より1989年まで東京都交響楽団の指揮者を務めた。ロンドンのロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団には1988年より定期的に招かれ、コンサートとレコーディングを行い、チャイコフスキーの交響曲4、5、6番のディスクを完成させた。

1989年4月より九州交響楽団の首席指揮者に就任。1989/90年シーズンからは活動の中心を日本に移し、多くのオーケストラに招かれる一方、オペラにも力を注いでいる。

1992年4月より大阪センチュリー交響楽団の首席客演指揮者。新響とは第136回演奏会《山田一雄追悼演奏会》以来、今回が2度目の共演となる。

## モーツァルト：交響曲第33番 変ロ長調 K.319

Wolfgang Amadeus MOZART : Symphony No.33 B-flat major K.319

ドイツの小さな町

日曜日の朝は、いつも少しでも早く起きることにしている。そう、或る仕事をするために「ドイツの小さな町」ボンに出掛ける時間よりもちょっとだけ早く、このル・カレの小説の舞台ともなった町の郊外・イペンドルフの1月の曇天に仄かな明るさが——まるで「本当は未だ夜の儘にしておきたいのだけれど、規則だから僅か乍ら照らしているんだ」と凝固した灰色の雪雲の遙か上空から世紀末の太陽が力無く顎を擡げて眩れているといった風情で——昨日や一昨日と（または明日、明後日でも）同じ無表情な流儀で再来する頃の時刻を漫然と過ごすために。

7時まであと丁度20分。キッチンから沸いたコーヒが薫る。いつもと同じ糊の程良く効いたライラック色で無地のテーブルクロス、細い2本の黄金線が疾走する皿やカップ・ミルク壺、そして戦前の銀食器。いつもと寸分違わぬこれらの配置。

厚い絨緞が敷き詰められた薄暗い居間、赤く小さなランプを目標にオーディオセットのパワーを入れる。50センチメートル四方に唐突に瞬くイルミネーション達。ヴォリュームは勿論絞ってある。

ここ2週間ばかり、この時間帯は『ドイツ語圏の古典音楽』が放送され、モーツァルト特集はこの前の水曜からだ。この“緑の樹陰の涼風を知っている”天才音楽家が創作した遊戯を、とうの昔に天に召された彼に替って現代の人間達が舞っている。……

モーツァルトに限らず、音楽が「光と影」だなんて、そんなことあるものか、と思ってみる。音たちに無理強いして網膜を掠めてもらうことよりも、そこで息をして、全身で感受して、もっとメランコリックに……。

煙草に火をつける。執務机の上には昨晚何度も読み返した手紙と同封されたチケットが白っぽく浮上って見える。レースのカーテン越しに隣家の電燈が点された窓が一つ、また一つと増え、町が止むを得ず覚醒していく。

思い出したようにスピーカーからアナウンサーが囁き、半睡状態だった思考が戻る。[モーツァルトのマンハイムからパリへの旅行は失敗に終り——母を亡くし恋も失い——故郷ザルツブルクの穏やかな風土に接し——この33番は彼の田園交響曲とも——]

そして突然に部屋を変ロ長調の主和音が満ちた。外国の、ハプスブルクの音楽。メイドが朝食の用意が整った旨低い声で告げると、さて寝室の掃除をと幾分か小気味良い足取りで去って行く。足音のリズムが消え行く気配を合図に煙草の火を消すと、妻が微笑む写真立ての位置を直し食卓へ向う。シャツのポケットに入れたチケットが、アレグロの合間にカサッと音を立てた。何年振りになるのだろうか。——

稲田 祥（ファゴット）

初 演：不明。作曲後ザルツブルクで演奏？

楽器編成：オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦楽5部。

## 団員募集！

新交響楽団は会社員、教員、学生、主婦などなど、さまざまな職業・年齢にわたる団員で自主運営されているアマチュアオーケストラです。音楽監督の故芥川也寸志氏が長年にわたって主張し続けてきた「音楽はみんなのもの」を実践し、常に新しい視点を持って活動していくために、あなたの力が必要です。何はともあれ、ぜひ一

度練習をご覧ください。いつでも歓迎です。団費：入団費3,000円、団費月額4,000円。練習は毎週土曜午後6～9時、東京文化会館他にて。

なお、新響では入団に際してはオーディションがあります。詳細は下記斎藤までお問い合わせ下さい。

・連絡先……………斎藤茂樹 ☎043(287)3388

# 伊福部 昭：日本狂詩曲

IFUKUBE Akira : Japanese Rhapsody

1994年、伊福部昭先生は傘寿を迎える。

新交響楽団ではこれを記念して、昨年のベルリン芸術週間と帰国記念演奏会で「オーケストラとマリムバのためのラウダ・コンチェルタータ(1976)」を演奏したのに続き、1994年の演奏会で氏の代表作「日本狂詩曲(1935)」「交響譚詩(1943)」「管弦楽のための日本組曲(1991)」「シンフォニア・タプカーラ改訂版(1979)」を連続して取り上げる予定である。

伊福部昭は1914年5月31日、北海道釧路に生まれた。伊福部家は出雲の豪族で代々神官をつとめ、氏は第67代にあたる。警察署長をつとめていた父の転勤に伴い、網走、札幌と転居し、1923年の晩夏、村長となった父と共に、帯広の郊外、十勝平野の北部に位置する音更おとふけに移り小学校時代を過ごした。この地でアイヌ民族と交流し、アイヌ民族の伝統音楽に接した体験は強い印象を残した。

1926年、札幌二中に入学し、三浦淳史（現音楽評論家）と同級となる。三浦は海外の多彩な最新の音楽情報を紹介したうえに、当時ヴァイオリンやギターを弾いていた伊福部に、音楽をやる以上は作曲以外の行為は無意味であると説いた。

1932年、北海道帝国大学農学部林学科に入学。翌年、作曲家志望で同年齢の早坂文雄と知り合う。この頃の様子を三浦が書いている。『伊福部昭と故・早坂文雄と僕は、土曜日の晩には、ネヴォ（注：ロシア語で青空という意味の札幌北三条通りの喫茶店）詣でをした時期があった。十時まではいわゆる名曲が鳴っているので、「ペレアスとメリザンド」のような現代音楽は、店内が僕たち三人になった時点で、かけてもらうのである。「ペレアス」を初めて聴いて、夜更けの通りに出たとき、初雪が音もなく降り敷いていた。伊福部も、早坂も、言葉を失ったかのように、何も言えなかった。……中略……あまりにも大量の、未知の美しいものが、はいりこんできたせいだ、僕たちは言葉を発することもできなかったのだ』また、伊福部はこうも語っている。『……それからヨーゼフ・シゲティの弾いたプロコフィエフの「ヴ

アイオリン・コンチェルト第一番」のレコードが、今も残っている千秋庵という店にあるというので、早坂君と三浦淳史君と僕と三人で行ったんです。でも、一楽章の途中で早坂君は青くなって失神しちゃったんですよ。もう、レコードを止めて、頭を冷やすなどして大騒ぎでした。後で「どうした」って聞いたら「いや、ちょっとショックだった」と言っていて(笑)』

1935年、北大を卒業し地方林務官として厚岸町あつけしの森林事務所に赴任する。当時、指揮者フェビアン・セヴィツキー（大指揮者クーセヴィツキーの甥）と文通していた三浦は新作演奏の確約をとり、21歳の極東の無名の作曲家伊福部は「日本狂詩曲」を書き上げ、セヴィツキーに献呈する。この年、同曲を持ってチェレプニン賞（審査委員はルーセル、イベール、タンスマンら8名）に応募し、第1席入賞となる。

1936年、「日本狂詩曲」は、セヴィツキーにより米国ボストンで初演され、ボストン・グローブ紙など3紙に絶賛された。

その後も1940年まで厚岸での生活は継続された。最初の一音だけで伊福部の音楽と分かる強烈な色彩と個性の傑作「土俗的三連画(1937)」が、忙しい林務官としての仕事の傍ら森林事務所のランプの下で作曲されたことは、伝説的事実である。

天才の誕生であった。

## 第1楽章 夜想曲

夜の静寂のむこうから、太鼓とドローン（長く長く響く低い音）にのったヴィオラのソロで、祈り、踊るような旋律が歌われる。

旋律が途切れると、夜の気配は一層深く農密となる。木管により夜の冷気が歌われた後、冒頭の旋律が今度はあたかも集団で踊るかのようにはヴァイオリンのテュッティで蘇り、ホルンの響きとハーブのアルペジオにより、夜が更けていくかのように静かに終わる。

中間部を除き、常にリズム・オスティナートが聴

こえる。

## 第2楽章 祭

構造は把握しにくい。原始的に聴こえ、それでいて巧みなオーケストレーションによる色彩感溢れた数種の日本的な短いフレーズが繰り返し演奏される、汎アジア的印象の濃い楽章である。

クラリネットのソロと打楽器を中心としたオーケストラのテュッティとに分けられた、特徴的な導入部が演奏された後、トランペットに軽快な第1のテーマが現れる。同一テーマがトランペットとテュッティで3度奏された後、第2のテーマが、裏に第3のテーマを見え隠れさせながら再び3度繰り返されると、第3のテーマがオーケストラのテュッティにより提示される。このテーマは導入部の動機による経過的小節を挟みながら5度繰り返されて音楽を拡

大していくが、金管群を中心とした導入部テーマの強奏により突然中断する。

トランペットと弦楽器を中心に呑気なユーモアを感じさせる新たな旋律のあと、断片的なリズム動機を重ねると、導入部のクラリネットによるテーマが強烈な弦楽器の開放弦の響きを伴って木管に戻ってくる。

すべての旋律、リズムの断片が繰り返され、重なりあって高揚し、管弦打による極彩色のクライマックスを築いて終わる。

奥平 一 (ヴィオラ)

初 演：1936年4月5日、フェビアン・セヴィツキー指揮、ボストンにて。  
楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2（2番はEsクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓2、カステネット、タンブリン、ウッドブロック、タムタム、ピアノ、ハープ2、弦楽5部。



# Japan Shostakovich Society

## 日本ショスタコーヴィチ協会が会員を募集

日本ショスタコーヴィチ協会は、ショスタコーヴィチに関してのあらゆる分野の研究とデータを収集、ショスタコーヴィチを愛好する会員同士の意見交換、親睦を目的として1992年に活動を始めた団体。同協会は世界ショスタコーヴィチ協会の日本支部としての位置づけを持ち、作曲家の未亡人をはじめ、アシュケナージやロストロポーヴィチ、シュニトケなど、ショスタコーヴィチと関係の深い内外の音楽家も同協会の名誉会員となっている。

会では貴重なインタビュー・記事を満載した協会ニュースを発行、またショスタコーヴィチゆかりの音楽家を招いての親睦会やシンポジウムも企画している。なお会費等は一般会員が入会金¥3,000、年会費¥5,000。詳細は下記へ連絡のこと。

連絡先：日本ショスタコーヴィチ協会（事務局：一柳富美子）  
〒115 東京都北区赤羽2-17-5-404 ☎03-3901-3358 Fax03-3901-3120

またひとつ美しい音、カメラータから。

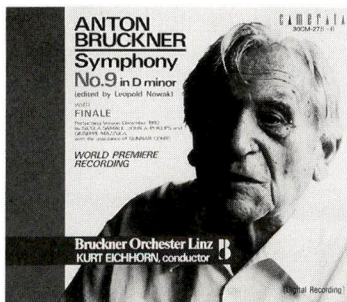
**BRUCKNER  
ORCHESTER  
LINZ  
EICHHORN**



遂に完成された歴史的なフィナーレの本格的な復元版を備えた、ブルックナー『第9』へ全4楽章へ衝撃の世界初録音!!

アイヒホルン入魂の名演。

# ブルックナー：交響曲第9番(終楽章付) アイヒホルン/リンツ・ブルックナー管弦楽団



●ブルックナー  
交響曲第9番ニ短調 第1〜第3楽章(ノヴァーク版)  
☆フィナーレ第4楽章(サマーレ、フィリップス、マツコ&コーレス  
補作完成1992年12月版)

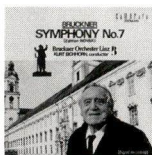
クルト・アイヒホルン指揮  
リンツ・ブルックナー管弦楽団

[CD]30CM-275〜6(2枚組)  
¥5,634(税込)  
★デジタル録音:1992年4月/☆1993年2月、  
リンツ・ブルックナー・ハウス



1996年“ブルックナー没後100年記念”

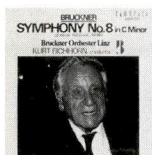
アイヒホルン=リンツ・ブルックナー・オーケ



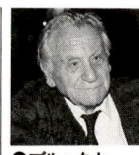
●ブルックナー  
交響曲第7番ホ長調  
〈ノヴァーク版〉  
[CD]32CM-165  
¥3,008(税込)  
絶賛発売中



●ブルックナー  
交響曲第2番ハ短調  
〈1872 & 1873年稿〉世界初録音  
[CD]30CM-195〜6(2枚組)  
¥5,634(税込)  
絶賛発売中

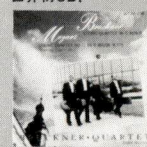


●ブルックナー  
交響曲第8番ハ短調  
〈ノヴァーク・1890年版〉  
[CD]32CM-225  
¥3,008(税込)  
絶賛発売中



●ブルックナー  
交響曲第5番変ロ長調  
〈ノヴァーク版〉  
[CD]25CM-335〜6(2枚組)  
¥5,150(税込)  
★デジタル最新録音:1993年7月  
リンツ・ブルックナー・ハウス  
来春発売予定

ブルックナー・ファン必聴の秘曲。  
世界初CD!



●ブルックナー  
弦楽四重奏曲ハ短調ほか  
リンツ・ブルックナー弦楽四重奏団  
[CD]32CM-256  
¥3,008(税込)  
絶賛発売中

**C A M E R A T A**  
カメラータウキョウ

〒150 東京都渋谷区神宮前5-50-6 青山テネックス8F ☎03-3498-5890 FAX.03-3498-6239

「ブルックナー交響曲全集」進行中!

# ショスタコーヴィチ：交響曲第10番 ホ短調 作品93

Dimitry Dimitrievich SHOSTAKOVICH : Symphony No.10 in e minor Op.93

## 現代ソビエトの音楽

初めての練習の後、モスクワ駐在が長かったヴァイオリンのK氏と、「ソ連だなあ」と語り合った。新響は、前回の演奏会でチャイコフスキーの5番を演奏したが、同じ地域出身の作曲家を連続して取り上げたことによって、妙にその違いが実感できた。チャイコフスキーは「ロシア」だが、ショスタコーヴィチは「ソ連」なのである。全くもって無責任な考えで、なぜかと尋ねられても答えられないが、とにかくそうなのである。

## 正統派の交響曲

ショスタコーヴィチ（1906～1975）の交響曲は全部で15曲ある。ずいぶんたくさんあるものである。驚異的な数だと言わなければならない。作曲年代も19歳から65歳までと、ほぼその生涯全般にわたっている。新響ではこれまでに、1番・4番（日本初演）・5番・7番・11番の交響曲を取り上げている。

交響曲とは、普通は4楽章からなる絶対音楽であるが、ショスタコーヴィチの交響曲で4楽章構成なのは、半分以下の7曲しかない。さらに、11番と12番が標題音楽であることを考えると、純粋な絶対音楽は、5曲しかないことになる。

その5曲のうちの1曲が、演奏時間50分を越す大作、今晩演奏する「交響曲第10番ホ短調作品93」である。

## 曲にまつわる話

ショスタコーヴィチによると、この曲は、入念な下準備の後、夏から秋にかけて一気呵成に書かれたとのことである。ものすごい勢いである。私など、単に写譜するだけでも、それだけの期間では終わらないだろう。速筆はショスタコーヴィチの特徴のひとつで、他の作品も比較的短期間で書かれているものが多い。が、本人は、それは欠点のひとつであると述べている。

作曲者にとっては、8年ぶりに作曲した交響曲である。それまでは、ほぼ2、3年おきに1曲作って

いたこともあって、周囲の期待や反響も大きかった。スターリンの死後すぐに作曲が始まったという憶測が飛んだり、この曲についての公開討論会が3日にわたって行われたり、などだ。

今では、現代を代表する交響曲のひとつであるとの評価が定着している、日本でも、比較的早くから5番とともに日本版のスコアが出版されていたり、カラヤンがショスタコーヴィチの交響曲として唯一録音したレコードが発売されていたりなどして、なじみが深い。

## それでは曲目解説を

3管編成で、ピアノやハーブはない。個人的には、とにかく旋律が感動的で、かつ現代を感じさせる曲だと思っている。

第1楽章はモデラート。叙情的で息の長い、20分を越す長い音楽である。始めは長い音符ばかりで、3分位経ってからようやく8分音符が現われる。第2楽章はアレグロ。激しい緊迫感に満ちている。演奏する方は必死だが、あつというまに終わってしまう。第3楽章はアレグレット。以降のショスタコーヴィチを彷彿とさせる部分も多い。第4楽章はアンダンテの序奏とアレグロの主部。初演当時、他の楽章との雰囲気の違いが批判された。

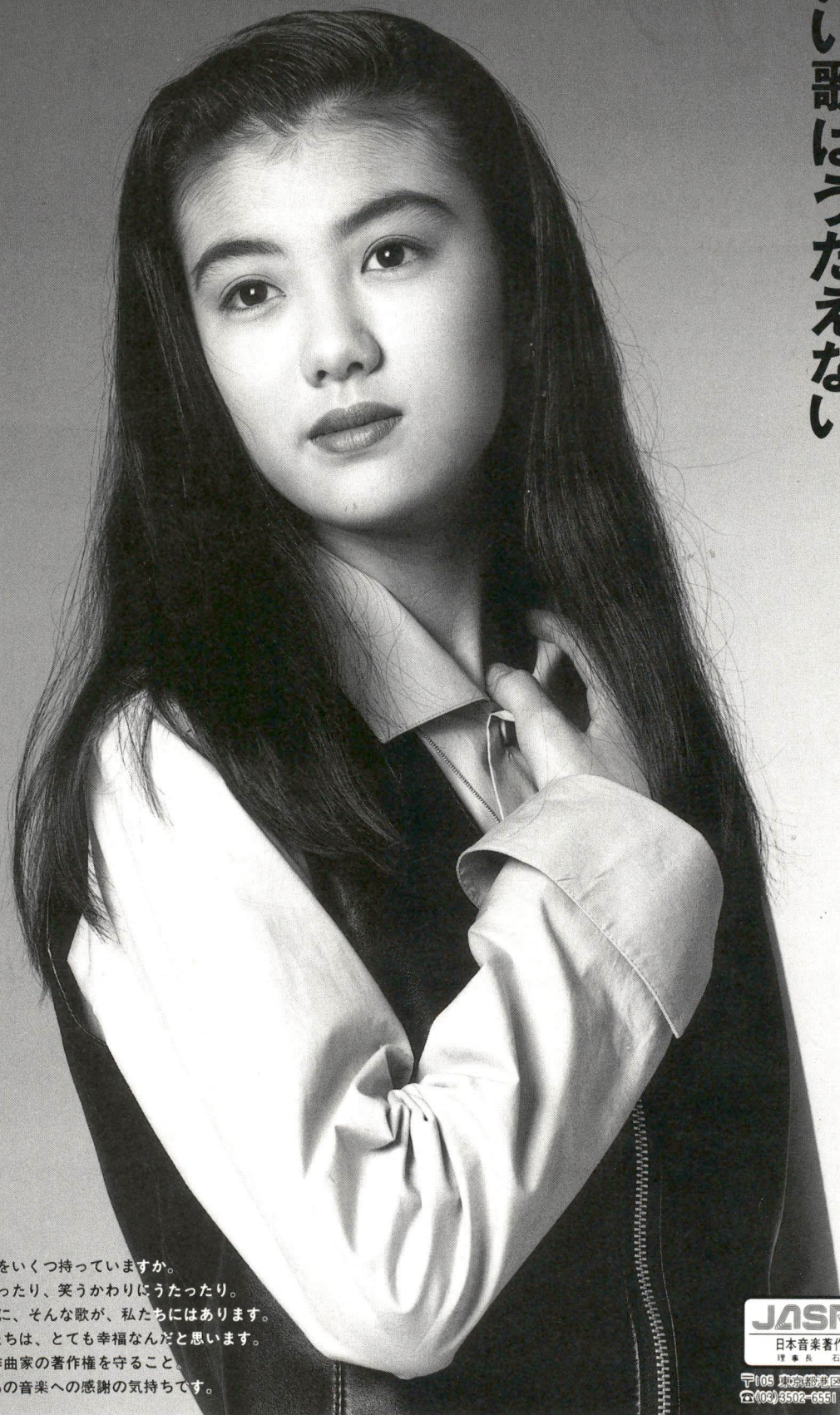
余談であるが、昔からショスタコーヴィチが大好きな私は、高い輸入版のスコアを無理して買っていたが、今では全交響曲のスコアが日本版で出版されている。もったいなかったが、これを機会に、隠された名曲も含めて、どんどんショスタコーヴィチの音楽が広まってくれることを願っている。

桑形和宏（ティンパニ）

初演：1953年12月17日、エフゲニ・ムラヴィンスキーの指揮によりレニングラード（現サンクト・ペテルブルク）・フィルハーモニー交響楽団の定期にて。

楽器編成：ピッコロ、フルート2（2番はピッコロ持替）、オーボエ3（3番はコールアングレ持替）、E♭クラリネット、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、タムタム、シロフォン、弦楽5部。

いい歌がなければ、  
いい歌はうたえない。



好きな歌をいくつ持っていますか。

涙のかわりにうたったり、笑うかわりにうたったり。

選んだわけでもないのに、そんな歌が、私たちにはあります。

うたえる歌を持つ私たちは、とても幸福なんだと思います。

作詞家、作曲家の著作権を守ること。

それは、私たちの音楽への感謝の気持ちです。



〒105 東京都港区西新橋1-7-13  
☎(03) 3502-6551

T H A N K S F O R M U S I C